

強者の戦略

受験生としての一年が始まりました。楽しみながら、けれど着実に勉強を進めましょう！
次の文章は作者を西行に仮託した説話集『撰集抄』の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

播磨国と聞こえしなんめり。「おぼろけならでは人もかよはぬ山の中に、杣する人の三人つれて入り侍りけるが、山中を見めぐりけるに、山の谷あひに木暗きこともいたくはなかりける所に、木の枝、木の葉などにてとかく構へたる、形ばかりなる庵に、木の葉を敷きつつ、黒き衣ばかり着たる僧の死にて侍りけるを、鳥の来てありけると覺えて、目なんども突き損じて侍り。かたはらにけしかる硯・筆ばかり侍り。大きな木にかく書き付け侍り。『死生共に死生にあらず。無来無去にして本来寂靜なり』と書きたりと語り侍りけれど、その里の人、尋ねいたりて見ることもなく、やみ侍りし」と伝へ聞きき。

いかなる人にていまそかりけん。Aかへすがへすゆかしく侍り。谷の深きに隱居して、峰の松風に思ひをすます禅僧にこそ。いづれのころよりの所に住みけん。庵なんどは神さびて古めかしきさまに見えけるなれば、年経けるにこそ。「何とて露の身をさきゆるわざも侍りけるやらん」と、心苦しく貴く侍り。生死も生死にあらず、また来も去もこれには侍らざりけん。「心の中、やるかたなく澄みわたり侍りて、かやうの座禅などは、世の末には難かるべし」など言ふ人も侍りければ、かならずしもさは侍るまじきや。かた岡山のわび人の、機も餓えて、臥していまそかりけることなどを伝へ聞き侍るには、「B座禅の機は、なかなか当時そのころにや侍らん」とおぼえ侍り。あはれ、貴かりけることかな。硯よりほかには何も持たざりけんも、よしありておぼえ侍り。

世をのがるる人のありさま、しなじなに侍れども、海の辺、深山のすまひは、ことにうらやましくも侍れど、さしあたつては、身一つ助くる糧のはかりがたさに、独居の太山のすまひもかなひがたくて、世に経るぞかしな。詮は、ただこの身を惜しみ、かへりみる思ひの、はなはだしきにこそ侍れ。何にかこの身を惜しむべき。惜しまずは、なか山深く思ひ澄まさで侍る。Cそもそも、「本来寂靜なり」とは何の寂靜ぞや。「無来無去なり」とは何のものをか指し侍りけん。

注 ○杣する人——きこり樵。

問一 傍線部Aのように筆者が述べたのはなぜか。わかりやすく説明せよ。

問二 傍線部Bを現代語訳せよ。

問三 傍線部Cで筆者が述べたかったことは何か。本文全体を踏まえて、わかりやすく説明せよ。